

米語の一断面

——特にその informality と dynamism について——

四方田 敏

目次

1. はじめに
2. Swear Words の多用
3. 「数」の表現
4. 「接続詞」について
5. 「混合語法」の多用
6. 「伝達動詞」の語順
7. おわりに

1. はじめに

米語を読んでいて感ずることは、米語は自分の思ったり、感じたりすることを素直に飾り気なく、straight に表現するということである。つまり、あまり自己抑制しないで表現する傾向が目立つのである。従って、英国英語が知的に、客観的に表現するところをもつとだいたんに感覚的に表現するようところが米語にはよく観取されるのである。そしてこの特質が米語の非形式性とその dynamism を生み出していると見てよいであろう。

そしてこの由って来るところは、これを社会史的に見れば、17世紀に英国人が初めてアメリカ大陸のニューイングランドに上陸し、海岸を南北に沿って開拓し始め、それから中央又西部へと移動しつつ開拓を進めて行ったことによる米国人

米語の一断面

の絶え間ない移動による着着きのなさ、安定した社会の形式を嫌う性格又規制されない自由への志向などをつくり出したと言えよう。それからまた、いろいろな人種の移民から成る多民族国家であるということが彼等がおたがいを理解させ、コミュニケーションを図るために易しい、解り易い形式的でない言語表現をつくり出す原因をなしていると思はれるのである。

この小論の目的は、米語の文献を通して現代の、つまり20世紀の米語の特色の或る局面を発見して記述せんとするものである。

2. Swear Words の多用

米語にはいわゆる“呪いの語”を自由大胆に用いる傾向があって、米語を多彩なものにしている。

2. 1 Hell の複合語

Mencken によれば、hell の使用は無期限に続くと思われる理由があると言ふ。それは hell が単純な形で用いられずにいろいろな複合語を造るからであると言ふ。例えば、hell-bent (なんとしても……するつもりでいる)、hell-bent for a quarrel (なにがなんでもけんかを始めるつもりでいる)、hell-bender (向う見ずな人)、hell roaring (荒々しくあばれ回る)、hell-raiser (騒ぎを常習的に引き起す人)、hellion (乱暴で手に負えない人)、などがある。以上はすべて Americanism である。又形容詞としては hellishing があり、he was in a hellishing hurry (彼はものすごくあわてていた) のようなものがある。

文献からの筆者の見つけた例としては、“I hellborn, child,” Nancy said. “I wont be nothing soon.” (Faulkner, *That Evening Sun*) (坊や、いまいまいこった。でもそのうち黒んぼでもなんでもない者になっちゃうさ)

2. 2 Hell out of…… の型

- (1) He looked at me like he'd just beaten hell out of me in ping-pong or something. (Salinger, *The Catcher in the Rye*)

(ピンポンかなんかで、僕をぎゅっという目にあわせたばかりのように彼

は僕を眺めた。)

- (2) They probably thought I was too young to give anybody the once over. That annoyed hell out of me. (*Ibid.*)

(彼女たちはおそらく、僕がちらっと色目を使うには若すぎると思ったんだろう、これには僕も腹が立った)

- (3) Some guy next to me was snowing hell out of the babe he was with. (*Ibid.*)

(僕の隣の奴は連れの女の子にしきりにおせいじをふりまいていた)

- (4) She was depressing the hell out of me. (*Ibid.*)

(彼女は僕をひどく憂鬱にさせていた)

- (5) That's something that annoys hell out of me. (*Ibid.*)

(それは僕をひどく困らせるものだ)

上記の如く Salinger の *The Catcher in the Rye* にはこの型の表現が多いのは、この小説の主人公である Holden Caulfield という16歳の少年が Pencey 予備校を退校させられており、いわゆる少年らしい反抗心で物事をうさん臭くみているから、swear word が多くなるのである。

その他の文献からの例としては、

- (6) "But if anybody so much as lays a finger on it (=the piano) next time I personally will kick the hell out of him." (Steinbeck, *Cannery Row*)

(こんどピアノに指で触れるようなことをした奴が居たら、俺としてはそいつをさんざん蹴って追い出してやる)

- (7) "He's gonna beat hell outa you with a stick. (Id., *Of Mice and Men*)

(奴はお前を棒で追っ払うだろう)

- (8) My old woman means right and does right and it beats the hell out of me every day. (Hemingway, *Islands in the Stream*)

(俺のかみさんは心は善良で行いもよいし、そのため俺は毎日こてんぱんにされている)

- (9) 'Let me catch you drink anything but beer.' I beat the hell out of you. (*Ibid.*)

(ビール以外のものを飲んでいるところを俺につかまってみろ、たたき出してやるぞ)

2. 3 A hell of

- (1) Bill was a hell of a nice fella. (Stein-back, *Of Mice and Men*)

(ビルはどえらくいい奴だった)

- (2) "There's a hell of a lot to be done," he said. (Hemingway, *The Short Happy Life of Francis Macomber*)

(“しなければならぬことがえらくたくさんある”と彼は言った)

- (3) After they've been hit once they take a hell of a lot of killing. (*Ibid.*)

(一度弾があたると、やつらはむちゃくちゃな暴れかたをします)

- (4) 'That does it,' said Wilson. 'Got the spine. They're a hell of a looking thing, aren't they?' (*Ibid.*)

(“それでいいのです”。おそらくぶざまな恰好をしたやつですね)

又上記の a hell of a が崩れて、一層俗語的なものになったのが a helluva である。

- (5) he's a helluva handsome guy.

(彼はすごい美男子だ)

- (6) It was a helluva lot easier getting out of the house than it was.

(家の中へはいるよりも出る方が全然容易であった)

以上は二例とも Salinger の *The Catcher in the Rye* からの引用である。

2. 4 The hell の副詞用法

- (1) "The hell you wouldn't," said the rabbit. "You ain't worth a greased jack-pin to ram you into hell." (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(「あてになるもんかい」とウサギはいった。おまえは三文の値うちもな

い男さ。)

- (2) The hell you don't, Yogi thought, if you've two years in the infantry at the front. The hell it was. (Hemingway, *The Torrents of Spring*)

(歩兵として2年も戦線にいたら、誰だってそんなに殺したりするもんか。へん、その通りだとも)

- (3) Candy said hopefully, "you ain't got no gun." The hell I ain't. Got a Luger. It won't hurt him none at all. (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(キャンディは希望をもって「お前は拳銃を持っていない」と言った。「ああ持ってないのもいいところさ」。ラガー(ドイツ製の自動拳銃)を持っているよ。そいつなら奴はちっとも痛くはないさ)

- (3) the hell of it is that it usually is too early or too late. (Hemingway, *To Have and Have Not*)

(いまいましい話だが、はやすぎたり、おそすぎたりするんだ)

上記の例文3の the hell は文修飾の副詞の機能を果していると言うことができる

2. 5 The hell の述語用法

- (1) 'Yes, he said' That's the hell of it. You probably will. (Hemingway, *The Sea Changes*)

(うん、勝手にしやがれ、君は多分帰って来るだろうよ)

- (2) 'Wouldn't it be hell to be in town?' Bill said. (Id., *The Three-Day Blow*)

(「町にいるのはやりきれないだろうな」とビルは言った)

2. 6 Hell の動詞用法

hell を動詞として用いるのは、いかにも米語の dynamic な性格を表わしていると言うことができる。

He was watching us helling along. (Hemingway, *The Short Happy Life of Francis Macomber*)

米語の一断面

(彼はわれわれが、がむしゃらに車をとばすのを見ていた)

2. 7 Like hell (as hell)

- (1) He's dumb as hell. (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(奴はまるっきる啞だ)

- (2) but I am saying all this hysteric business is unattractive as hell.

(Salinger, *Franny and Zooey*)

(こんなヒステリックなことは僕には全然魅力がないと言っているんです)

- (3) two guys came out, dumb as hell. (Id., *The Catcher in the Rye*)

(野郎が二人、べろんべろんに酔っ払って出て来た)

- (4) "maybe you better go in the wash-room and clean up your face." you look like hell. (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(洗面所へ行って、顔をきれいに洗ってこいよ。ひでえ顔をしているぞ)

- (5) I resent like hell being haunted by a half-dead one. (Salinger, *Franny and Zooey*)

(半死半生の幽霊に出てこられるなんてまったく腹が立つ)

- (6) "I'll go straight home and tell everybody." "Like hell you will, cry-baby," Pete said, grabbing him. (Caldwell, *Place Called Estherville*)

(「これからまっすぐ家に帰って、みんなに話してやる」)

(「ぜったいに話しちゃならないよ、この弱虫め」とピートは彼をひっつかんで言った)

- (7) 'I just went out to get a breath of air' 'you did, like hell.' (Hemingway, *Happy Life of Francis Macomber*)

(「空気を吸いにちょっと出ただけよ。」)

(でたらめ言うなよ)

上例でも解る通り、like hell と as hell との間には少しく差異があるように思われる。as hell の場合は、だいたい前置の形容詞を修飾する強意用法の副詞

の機能を持っていることが分かる。しかし、like hellの方はdynamicに機能を広げて、多彩なものにしている。このlike hellについて、⁽¹⁾ *Dictionary of Contemporary English* (Longman) はそれがphraseの前に在る場合には、not at all soとなり、それがphraseのあとに在る場合には、very muchの意味となると述べているが、上例の(7)ような場合があるのであるから、その記述には修正を施す必要があると思われる。

最後にbastardとson of a bitchについて少しく触れておく、先づbastardの面白い例として、

It was a Saturday and it was raining like a bastard out. (Salinger, *The Catcher in the Rye*)

(その日は土曜日だった。雨がじゃんじゃん降っていた)

次にson of a bitchが分詞形をとっているson of a bitchingの例を示す。

"You're always sayin" that, an' you know son-of-a bitching well you ain't never gonna do it. (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(お前はいつもそうずると言っている。ところが、そうしないっていうことは百も承知の助なんだ)

What the hell did he have to blow that lick to hell for the first morning and gut-shoot a lousy bull and chase him all over the son-of-a bitching country spooking it to holy bloody hell? (Hemingway)

(なんだってあのろくでもない雄牛の腹なんか射ったあげく、そこいらじゅう追いかけて回してあたりのやつらをおじけづかせてしまったんだ)

勿論son of a bitchを一時的に分詞形をとらせることによって、この語句をより動的に力強くさせたもので、これも米語の好む一つの傾向のあらわれと見てよいかも知れない。

3. 「数」の表現

米語には、There isのあとに複数名詞がくる構文が好まれる傾向があるよう

米語の一断面

である。米人の作家の作品中にはこの型のものが多数に見出される。

- (1) There was some gulf weed on the stream and a few birds working, but not many. (Hemingway, *To Have and Have Not*)

(湾流には海草がただよい、鳥があざっていたが、ほんの二、三羽だけであつた)

- (2) “No, there’s sixteen with today” (*Ibid.*)

(いや、今日を入れると16日あるさ)

- (3) “There’s worse things than lose an arm.” (*Ibid.*)

(片腕をなくすよりももっとひどいことがあるさ)

- (4) “He ain’t the first,” said George, “There’s plenty done that.” (Steinback, *Of Mice and Men*)

(「奴が初めてではない。そうした奴はたくさん居るさ」とジョージは言った。)

- (5) “There’s guys around here walkin’ bowlegged.” (*Ibid.*)

(この辺りにはがにまたで歩く奴が居るんだよ)

- (6) “I didn’t know there was so many scaredy cats in town.” (Caldwell, *Place Called Estherville*)

(都会にはおびえやすい人間がこんなにたくさん居るとは知らなかった。)

- (7) “There’s plenty of places around town where I can always get anything good I want.” (*Ibid.*)

(町のあちこちに ‘欲しいと思う物がいつでも買える所がたくさんある)

- (8) “There’s plenty of other good boys who want the job.” (*Ibid.*)

(その仕事を欲しがる善良な少年たちが外にもたくさんいるんだ。)

上記の例文を見ても解るようにこの型の構文はすべて会話の文中に出てきている。くだけた口語いわゆる俗語と言ってよいものである。

この他にも、数の観念が動詞に呼応して現われない構文がある。

- (1) “If something *don’t* happen to this town pretty quick, things are

going to be bad.” (Hemingway, *To Have and Have Not*)

(かなり早く、何かがこの町に起ってくれなくちゃ、この町も情けないことになるぜ)

- (2) “I hope it *don't* rain until after I kill those damn mice.” (Steinbeck, *The Leader of the People*)

(僕があのおねずみのやつを殺しちゃうまで、雨が降らなけりゃいいね)

- (3) “Ever' time the guys *is* around she shows up.” (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(男たちの居る所にはいつでも、彼女が現れる)

- (4) Jim shouted at me, “here *comes* the Swedes!” (Caldwell, *Country Full of Swedes.*)

(ジムは私に向かって叫んだ「ほら、スエーデン人がやってくる」)

- (5) “My girls *is* clean,” she says, “an' there ain't no water in my whisky.” (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(うちの娘達は汚れてはないわ、それにうちのウイスキーには水が混ざってはないわ)

- (6) “*Here's* the two of us without jobs.” (Steinbeck, *The Wayward Bus*)

(ほら、私たち二人には職がないのよ)

- (7) “She *say* something like that every now and then,” he said. (Flannery O'Connor, *The Displaced Person*)

(「時々、彼女はあんなことを言うんだ」と彼は言った。)

- (8) He (=the boss) was sure burned when you *wasn't* here this morning. Come right in when we *was* eatin' breakfast. (*Ibid.*)

(ボスは今朝あんたがここに居なかったとき、たしかにかつとなった。僕たちが朝飯を食べていたとき、つかつかと入って来たよ)

- (9) “I knowed they (=the turnips) *was* going to before I ever eat 'em.” (*Ibid.*)

米語の一断面

(俺はそのカブを食はないうちから腹痛が起きそうだということが分って
たんだ)

上記の例文はいずれも会話の中に出てくるもので、話している人物からして教養の低い人々で、その意味でも *substandard* な英語であることは明らかである。

次に *the government* が含む「数」観念が動詞にどう反影するかを見てみることにする。

先づ米語の例

- (1) In addition, the Bonn government *wants* to head off tensions that might lead East Germany to cut family contacts between East and West Germans. (*Newsweek*.)

(加えて、ボン政府は東西両ドイツの家族的な接触を断ち切ることを東ドイツにさせるかも知れない緊張を阻止したいと思っている。)

- (2) This time the South African Government *was* taking no chances. (*Ibid.*)

(こんどは南アフリカ政府は敢えてぶない橋は渡らなかつた)

- (3) The government, meanwhile, *is* trying desperately to shore up the economy. (*Ibid.*)

(その間、政府は経済のてこ入れのために懸命の努力を払っている。)

- (4) The government now *says* the union will be consulted prior to the bread price hike. (*Time*)

(政府はパンの値上げに先立って、組合に相談すると言っている)

- (5) The government *has* continued to arrest other activists. (*Time*)

(北京政府は他の活動家の逮捕をつづけた)

- (6) After allowing stirrings of protest, the government *turns* tough. (*Ibid.*)

(抗議の扇動を許したのち、政府は態度を硬化させる)

- (7) The government still *is* considering an embargo against oil from

Libya. (*The Daily Yomiuri*, (AP))

(アメリカ政府は依然としてリビヤからの油の輸入の禁止を考慮中である。)

米語では *the government* が単数の動詞形をとる場合がほとんどであるように思われる。

次にイギリス英語の例。

(1) *The Guatemalan Government is fighting a similar war against movements. (The Guardian)*

(ガテマラ政府はゲリラ活動に対して、同じような戦いをやっている)

(2) *The Christian Democrat Government of Venezuela is the strongest supporter of the civilian President of the Salvadorean junta. (Ibid.)*

(ベネズエラのキリスト民主党政府はサルバドル臨時政府の文官大統領のもっとも強力な支持者である。)

(3) *The French Government is seeking to influence the lending decisions of its nationalised banks. (Ibid.)*

(フランス政府はその国有化した銀行の貸付けの決定をも左右せんとしている)

(4) *The French Government itself is being forced to pay 17 percent on three-month Treasury bills. (Ibid.)*

(フランス政府は3ヶ月の短期証券の1割7分の利子を払うことを余儀なくされている)

(5) *In her present mood, which Mr. Hatoyama's Government seems to be interpreting, Japan aims at three things. (The London Times)*

(現在のムードでは、鳩山政府もそれを体しているようであるが、日本のねらいは三つある)

(6) *If the hydrogen bomb has to be used, no British Government are likely to do it without profound and anxious heart-searching. (Ibid.)*

米語の一断面

(水素爆弾を使用しなければならない場合、イギリス政府は非常に深刻な、不安にみちた疑念なしには、それをを用いることはないであろう)

- (7) And the Saigon Government *has* wished the press corps here to know that it will not flinch from continuing the war if necessary.
(*The Listener*)

(サイゴン政府は、必要とあらばひるまずに戦争を継続するつもりであることを当地の記者団に知らせたかった)

上記の例で分る通り、(6)を除いて、イギリス英語でも多数が *the government* に対して単数の意識で呼応するのである。このように米語と英語の引例を示すきっかけとなったものは J.N. Hook と E.G. Mathews による *Modern American Grammar and Usage* に米語とイギリス英語の異なる点として、アメリカは *the government* に対して *has* で呼応し、イギリス英語では *have* で呼応すると述べられていたからである。しかし、例文の示す如く、イギリス英語でも単数形の動詞形態をとることが多いことが判明したわけである。

4. 接続詞について

4. 1 The first thing+Clause 型の構造

この型には *the first thing+clause* と *the next thing+clause* の二つの型がある。いずれも典型的な口語英語である。

先づ *the first thing.....* の例。

- (1) I meant to speak to you first chance I had. (Sinclair Lewis, *Main Street*)

(あたしは機会があり次第、あなたに話す積りでしたよ)

- (2) "You'll kill him, the first thing you know." (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(お前はあれ(仔犬)を殺しちまうぞ、ふとした拍子にな)

- (3) First thing you know, we'd all be eating stewed chickweed and

acorns. (Shirley Jackson, *The Lottery*)

(ふと気が付いてみたら、吾々はハコベとドンブリのシチューを食べているだろう)

- (4) The first friendly thing he does, he will have made a decision.
(Hemingway, *For Whom the Bell Tolls*)

(親切なことをし始めた以上、彼は決心したのであろう)

- (5) The first he did know, she was walking by his side, erect and proud.
(Stowe, *Uncle Tom's Cabin*)

(ふと彼がきつくと、彼女は彼の横を体を真直ぐにして、誇り顔に歩いていた)

- (6) the first I knowed, the king got a-going. (Mark Twain, *The Adventure of Huckleberry Finn*)

(ふと気がつくと、王様が前へ進み出していた)

- (7) First you know, you'll get religion. (*Ibid.*)

(ふときがつくと、抹香くさくなっているだろう)

- (8) the first thing I knowed, I was asleep. (*Ibid.*)

(ふと気がつくと、僕は眠っていた)

次に the next thing you know 型の例。

- (1) The next thing you know he robbed a bank and killed a couple guards.

(つぎに気がついてみると (=とうとう) 彼は銀行強盗して、ガードマンを二人殺しちまった)

- (2) the next thing you knew it would be all over Easton that she'd been raped in Central Park. (Capote, *Master Misery*)

(次に気がついてみると、彼女がセントラルパークで暴行されたといううわさがイーストン中に広がっているだろう)

- (3) the next thing he knew, he was running, running wildly. (Hemingway)

way, *The Short Happy Life of Francis Macomber*)

(あと思った瞬間、彼はものすごい勢いでぐんぐん走っていた)

(4) next thing you know, they'll be wanting to go back to living in caves. (Shirley Jackson, *The Lottery*)

(それから気がついてみると、彼等は昔の穴居生活に戻りたいなんて言っているだろう)

(5) the next thing I knew, he was rich. (Saroyan, *The Man Who Got Fat.*)

(気がつくと、彼は金持だった)

上記の例文は見て分ることだが、the next thing のつくる clause と the first thing のつくる clause の間は少しの相違があるように思われる。

the next thing の場合は、中に含まれる動詞がすべて know である。the first thing の場合は、had や do のような動詞が現れることがある。又 the next thing の場合は、すべて主節の前に位置しているが、the first thing の場合は、主節のあとに位置するのが見られるのである。the first thing の場合は、多少自由な応用がきくと行ってよさそうである。何故であろうか。

the next thing の場合は「次に」という意味が考えられる。「次に」とは「或る何か」の次にと言うことである。つまり the next thing はその前にあった「何かの事」を受けて、それとの関連に於いて叙述すると考えることができよう。それ故に、the next thing は文頭に現れてくるのであって、若し、それが後の方に置かれたらおかしくなるのではなかろうか？ これに対し、the first thing はそれだけで独立して叙述を導くと言う性格を持っていると考えられる。故に、主節の前にも後にも来ることができるのである。例えば、the next thing の場合、

Saroyan からの例文 The next thing I knew についてみると、その前にある文が

He got wise to a better racket and cleaned up a lot of money.

である。つまり「彼はいっそう割りの良い商売をみつめて、たくさんのお金をつけた」を受けて The next thing が現れ、「彼は金持になった」がつづくのであろう。又例(3)の Hemingway の場合にしろ、その前に

Macomber heard the blood-choked coughing grunt, and saw the swishing rush in the grass.

がある。つまり「マコウマーは血にのどをつまらせたせき払いのよううなり声をきき、草の中をしゅっしゅっと突進してくるものを見た」を受けて、「次の瞬間」、走り出したわけである。これが the next thing you know 型の用法である。

いずれにせよこの二種の型は口語の典型的な姿であり、the first thing you know にせよ、the next thing you know にせよ、会話の冒頭にもってくると、親しい感じの語り口となって、話題を円滑に進めるのに便利であろう、又 Hemingway の the first friendly thing he does などは、実に具象的な鮮烈な口語表現と言ってよいものである。

4. 2 On account of+Clause

- (1) "I call him Master Misery on account of that's who he is"! (Capote, *Master Misery*)

(「あの男は正にそれらしい人間だから、僕は彼を“厄病神”と言うんだ)

- (2) I couldn't carry hardly any of our stuff on account of I have terrible trouble with my back. (Id., *My Side of the Matter*)

(私は背中にひどい故障があるものだから、自分たちの物はほとんど何も運ぶことができなかった)

- (3) We used to take the strappings kind of for granted, me and Joey, on account of we wanted to be fair and square with the Board of Education. (Saroyan, *The Circus*)

(僕たち、僕とジョーイは教育委員に対して公明正大でありたいと思っていたので、そのようなむち打ちをまあ当然なことと考えていたのだった)

- (4) he'd look over at me and say, 'Where's your girl!, Joe?' to kid me on account I had told him about the girl that day at the next table.
(Hemingway, *My Old Man*)

(親父は私の方へ眼をむけると、その日となりのテーブルにいた女のことを話しておいたものだから、「あの女の子はどうした、ジョー」と言って私をからかうのだった)

本来、前置詞句であるべきものが、接続詞句として用いられている。上記の(1), (2), (3)の3例には、on account of が用いられているが、(4)の Hemingway の引用文のみが On account を用いている。Wentworth によると、これら二つの形があるそうでいずれも方言的用法であると言う。何故このような機能変化が起きたかと言うと、推察ではあるが、on account of the fact that+clause の形式のものに省略が起り、つまり、the fact that が消失して、又 of まで drop して上記のような変則的用法が生じたのではないかと思われる。これが方言の特性であると言うことができる。

例えばこれは except+clause や time+clause のような用法にも現れてくる。

- (1) Make it top sergeant, in the old day's, except he's dealing always with the brass. (Hemingway, *Across the River into the Trees*)

昔の上級軍曹ということにでもするか、いつもお金を扱っている点だけはこちらがうけれど)

- (2) I couldn't tell how it looked except it looked all changed. (Id., *To Have and Have Not*)

(すっかり変ってしまった様に見えると言う以外にどんな様子が言えないくらいだった)

except の次に that の省かれたこのような用法は方言用法であると言えよう。次に time+clause の例。

"Time you get there the bridge might be gone." (Caldwell, *The Wayward Bus*)

(バスが行き着くころには、橋は流されてるだろうて)

これは when かあるいは at the time that... 又は by the time that の省略形であって、こう言う素朴な表現は方言である。Wentworth にもその旨記されている。

4. 3 Looks like to me とその類型

これは勿論、主語の it が前部省略された impersonal construction である。

- (1) Arch said, "Looks like to me it might be a ketch hound." (Caldwell, *Kneel to the Rising Sun*)

(アーチは言った。「どうも捕り犬のようにわしには思えるだがな」)

- (2) "Look like to me if I was in one of them, I would leave off." (Flannery O'Connor, *A Circle in the Fire*)

(わたしはそんな災難に見舞われたら、多分、だめになっちゃうわ)

- (3) "Looks to me like ever 'bone in his han' is bust." (Steinbeck, *Of Mice and Men*)

(手の指が、一本のこらず砕かれているようだぜ)

- (4) Jake was just about deaf, it looked like. (Saroyan, *The Oranges*)

(ジェークはほとんどつんぼだったのだろう)

- (5) "My tongue got slipped up somehow or other, it looks like." (Caldwell, *Place Called Estherville*)

(どういうわけか舌がすべっちゃったみたいなんです)

例文(2)の場合は it の三人称単数が look に反影しないで消失している。例文(1), (2)と及び(3)とでは to me の位置が違っているというように表現上の変形がみられる。又(4)と(5)では、it が姿を現わしているが、その位置は前位から後位へと移っている。例文(1), (2), (3)では、とにかく look like to me や looks to me like は文法形態の上では主節を成してはいるが、実際の意味の上では、全く従属的な力しか持っていないのは明白である。従ってこれらがその位置を文尾に移した例文(4), (5)の形態が生じたのもこのためであると言えよう。更にこの(4)と

(5)の形態に類似したものとして

Your cook kidnapped the child, looks like to me.⁽²⁾

がある。この場合には、it が姿を消してその代りに to me が加わっていて、もう一つの変形が現れている。このような種々な変形の存在は、この種の型の表現の口語的性格をいかに表わしていると言ってよいであろう。

他に類型として次のようなものがある。

(1) “Feels like mah bones is warm.” (Richard Wright, *Uncle Tom's Children*)

(俺の体の芯まで温かいみたいだよ)

(2) Feels like Ah got the flue. (*Ibid.*)

(アーは流感にかかったみたいである)

(3) “Too late to drive home. And tastes to me like a storm coming.” (Sinclair Lewis, *Main Street*)

(馬車で家へ帰るには遅くなり過ぎた。それにあらしが来そうだよ)

特に例文(3)の taste を用いた非人称構文は珍しいもので、具象的でいかにも感覚的な口語表現を表わしていると言える。

次に impersonal construction ではないが、listen が補語をとるという機能変化の用法について述べてみたい。

“What's this junk you want to see? Hm.” ‘How He Lied to Her Husband’ That doesn't listen so bad. Sounds racy. (Sinclair Lewis, *Main Street*)

(君の見たいこのくだらない芝居というのは？ ふん、「この手で彼は彼の夫をだました」というのか、そんなにつまらなそうでもないな。痛快な感じがするな)

上の例の listen の用い方など面白いと思うが、標準英語とは言えず、俗語用法と言えるものであろう。

5. 混合話法につて

米語には、この混合話法の頻用が目立つ。これも米語の dynamic 気質の表れと言ってよいものであろう。

- (1) I wondered *would you come and help?* (Sinclair Lewis, *Main Street*)

(あなたがいらっしゃって助けて下さるだろうかと思っていました)

- (2) I wonder *will she pay cash.* (*Ibid.*)

(あの女は現金^{ひと}払いをしてくれるかな)

- (3) He wants to know is it all right to use the rest rooms? (Ann Petry, *The Migraine Workers*)

(あの男は、洗面所を使用してもよいかどうか知りたがっている)

- (4) If they ask you *have you had any experience*, tell them sure, you were bell-boy at the La Salle Hotel in Chicago five years. (Saroyan, *The La Salle Hotel in Chicago.*)

(何かをした経験があるかと聞かれたならば、シカゴのラサルホテルで5年間、ベルボーイをしたことがあるとはっきり言えばいいのき)

- (5) Sabbath said. "Ask him *isn't he going to take you and me with him?*" (Flannery O'Connor, *Wise Blood*)

(サバスは言った。おとうちゃんに、お前とあたしを連れてってくれるか聞いてごらん)

- (6) What I really want to know is should I go the whole hog or not? (*Ibid.*)

(私がほんとうに知りたいのは、とことんまでやらなければならないかどうかと言うことなんです)

- (7) June Star said Play something she could tap to. (*Id.*, *A Good Man is Hard to Find*)

(ジェンスターは言った。何かタップで踊れる曲をかけてよ)

米語の一断面

- (8) The Judge had said always hire you a half-witted nigger because they don't have sense to stop working. (Id., *The Displaced Person*)

(判事は常に、まぬけなくろんばを雇いなさい。彼等は働くのを止めるほどの頭が働かないからだ)と言っていた)

- (9) So one of the other men asked him *why didn't he sell something*. (Capote, *Master Misery*)

(そこで他の男たちの一人が彼に何故物を売らないかと尋ねた)

- (10) Whereupon the third man said *yes*, there was something he could sell. (*Ibid.*)

(ここで三番目の人が言った「いいや、売れるものがあるさ」)

- (11) All I'm asking, *you know who I mean?* (Capote, *Breakfast at Tiffany's*)

(わしがきいているのは、ただあんたがその男を知っているかどうかということだけなんだ)

- (12) I told him look, darling, you've got the wrong Miss Golightly, I'm not a nurse that does tricks on the side. (*Ibid.*)

(あたしは弁護士にこうやってやったの「ねえ、あんた、ミス・ゴライトリーを見そこなっちゃ困りますよ。あたしは片手間にそんなまねをする看護婦じゃありませんから」ってさ)

- (13) I asked, wasn't it true that she'd been out on her own since she was fourteen? (*Ibid.*)

(私は、彼女が14からこの方、ずっと独り立ちしてきたというのはほんとうじゃないだろう、とたずねた)

上例の(1)~(6)までは、正に口語的心理の現われたもので生々とした語法を成していると言うことができる。

又(7)と(8)の例文は、本来なら「引用符」にかこまれているべきなのであるが、それが表に現われなかった形式であると言えよう。

いずれにせよ、このような混合話法の米語に於ける多用は、米語の informal で、dynamic な特長をいかんなく發揮していると言えるのである。

更に二つの例文を追加する。

- (4) He'd told the cap, a young fellow in a brand-new uniform with a cap too big for him—that, sure he threatened the woman with a tire iron, what with the heat and the humidity and all the rat finks running over the bell, honking their horns to hurry you up, saying fill her up, wash the windshield, check the battery, can I charge it. I haven't got the toll for the bridge, the stink of the diesel fuel and the stink from the exhaust from the big trucks in his nose, well, with all that, why, you go up to a car and there is some grinning woman with her skirt up to her thighs and her blond hair straggling down around her shoulders and half over her face, and she laughs because the tiger on the seat with her lunges at the big slob. (下略)
(Ann Petry, *The Migraine Workers*)

(彼は大きすぎる帽子をかぶり、ま新しい制服を着ている若い巡査に向かって話した、勿論、あっしはタイヤを車輪につけるのに使う鉄製の器具でその女をおどかしましたさ。いやむし暑い陽気でしてね、いや奴らがベルを踏みならし、警笛を鳴らして急がせるし、ガソリンを一杯入れろ、風防ガラスを洗へ、バッテリーを点検してくれ、つけにすることができるか、有料橋の橋銭を持ってねえとか言うんでさあ。それに皮膚には油や油脂がべたつき、ディーゼル燃料のいやな臭い、でっかいトラックの出す排気ガスの悪臭がするし、でもそんなさまでありながら、やれやれ、ある車の所へ行く、するとスカートをももまでたくし上げた女がにたにたしながら居る、ブロンドの髪が両肩にほつれてかかり、また顔半分をおおっている。彼女と一緒に座席にいるトラがこの大うすのろに突っかかるので笑うのだ。

上記の文は、間接話法の形をとりながら、意識や心理が先行してその流れのま

まに叙述して行ったので、間接話法の枠を飛び出して free style の書き方になっている。

I was thinking to myself that this Johnson had fished fifteen days, finally he hooks into a fish a fisherman would give a year to tie into, he loses him, he loses my heavy tackle, he makes a fool of himself and he sits there perfectly content, drinking with a rummy. (Hemingway, *To Have and Have Not*)

(このジョンソン奴は、15日間も釣をやって来て、漁師なら一年棒にふっても惜しくない位の魚をひっかけ、それを逃がす、俺のがっちりした釣道具まで取られて、全く物笑いになっている。それでいて、全く満走しきって、飲んだくれと酒を飲んでいる、俺はそうひそかに思っていた。

この例も、生々した心理が顔を出して、文法形式をとび越えて自由な叙述になっている。動詞の現在形はそれにふさわしい表現であると言うことができる。

6. 伝達動詞の語順について

伝達動詞 say が被伝達部の中間又は後に来た場合には、その主語が he などの代名詞であったときは、he says (said) の型式をとるのが現代英語における通有的な現象であると言える。しかし、19世紀頃までは says (said)+he の語順は珍らしくはなかったのは文献によっても容易に確認できることである。

この主語（代名詞）+伝達動詞の語順は現代米語についても同様である。筆者が米語作家の Hemingway, Fitzgerald, Steinbeck, Faulkner, Caldwell, Pearl Buck, March の7人について調べたところ、すべて「代名詞+動詞」の語順ばかりであって、その逆は一例もみられなかった。そして動詞も say 以外の began, whispered, continued などについても矢張り主語（代名詞）+動詞の語順をとることが確められたのである。

ところが、*Time* (October 12, 1981) を見ていると、Thomas Berger という、作家の *Reinhart's Woman* の解説が載って居り、それからの引用文として、

Foolishly, Reinhart was stung by the implication that he was lying. 'All right,' said he, 'you just ask Grace Greenwood. I start tomorrow.' I'm going to demonstrate food products.

(愚かにも、ラインハートはうそを言っていることをにおわされて胸苦しくなった。「ようし、グレース、グリーンウッドに尋ねてみるがいい、私は明日出掛けるよ。食品の説明をするんだよ」と言った。)

上記の例文では said he という old-style の語順がとられている稀な例である。これは前述した如く、英米を通じて現代では普通ではなく、その意味で興味深いと言わねばならない。

その外、伝達動詞の語順として、それが被伝達部の前にきた場合には、「主語＋動詞」が普通の語順であるが、アメリカの雑誌 *Time* や *News week* には「動詞＋主語」の語順をとることがよく見られるのである。

Claimed one exasperated Comtech official: "It would give us an excuse to get out." (*Newsweek*)

(或る憤激したコムテックの官僚は「それはわれわれに出てゆく口実を与えるだろう」と公言した)

Says one top State Department official: "Sadat is the keystone of our policies." (*Time*)

(或る国務省の高官は「サダトはわれわれの政策のかなめ石である」と言っている)

上記の例文ではその主語はいずれも名詞であるが、ジャーナリズムの文体ではその主語が代名詞のときでさえ「動詞＋代名詞」語順をとって被伝達部の前に現れるのである。これは矢張り *Time* などによくみられるものである。

Regan saw nothing wrong with the delay. Said he: "If our planes were shot down, yes, they'd wake me up right away."

(レーガンはその遅延をまちがっているとは思わなかった。「若し米軍機が撃墜されていたならば、部下はすぐさま私を起こしただろう」と彼は言っ

た)

Said he: “South Africa is a highly developed industrialized State”.

(「南アフリカは高度に発展した工業国家である」と彼(アフリカ国民会議の議長代理)は述べた)

Atkinson did not attempt to mask the gravity of the defeat. *Said he*: “It’s a remarkable change in British politics”

(アトキンソンはその敗北の重大性をおおい隠そうとはしなかった。「それはイギリス政治における著しい変化である」と彼は述べた)

しかし、この「伝達動詞+代名詞」という普通でない語順はそれが被伝達部の中間に現れたときは起らないのである。*Time* にもそのような例は見出されなかった。その理由は一体何故なのであろうか。

被伝達の前部では *says he (said he)* のような語順が起ると言うのは、*says (said)* が主題になっているからではないであろうか？ これは情報伝達を使命とするジャーナリスからすれば当然のことと思われるのである。伝達動詞が被伝達部の中間に起きたとき、*he says* などの普通の語順をとるのは、己に前部に情報内容が述べられているので伝達動詞 *say* の主題的意味が消失しているからではないであろうか？ 米語の *dynamic* な一面がここにも現われていると言うことができよう。

7. おわりに

米語の一局面としてこれまでに述べてきたことにより、米国人の生活感覚が米語にいかにかつ反映されているか一端に触れ得たと思うのである。米語は *British English* に比べると、より *straightforward* に感情や心理を表現する傾向がはっきりしていると言える。従って知的に訴えるというよりもむしろ感覚に訴えることを好む傾向がみられる。特に本稿では触れなかったが、それは単純形副詞 (*Flat adverb*) の多用にその一端が現れるのである。

この *Flat adverb* については、本学論叢の「マーク・トウェインの英語」(第

六巻、第一号) で触れたことがあるが、生々したアメリカ口語の特色であると言
ってよい。Hemingway の *My Old Man* にも次のような描写がある。

and then they came pounding out and down the hill and all going
nice and sweet and easy and taking the fence *somooth* in a bunch, and
moving away from us all *solid*.

(それから馬たちはパカパカと地面を強くたたきながら現れ、丘をくだり、
みんな上手に見事に悠々と走り、柵を一团となってあざやかに飛びこえ、み
んな一塊りになって吾々から遠ざかって行った)

ここにも感覚的に鮮烈なスピーディな、ダイナミックな米語の一面が明らかに
現れているのである。

注

- (1) Like hell he paid for the meal! I had to pay for it. (彼は絶対に食事代を払
わなかった。で私が払わなければならなかった)
- (2) 新クラウン英語熟語辞典

参考書目

- 尾上政次「現代米語文法」研究社。1957。
豊田実「アメリカ英語とその文体」研究社。1951。
安藤貞雄「英語語法研究」研究社。1969。
Quirk, Greenbaum, Leech, Svartvik, *A Grammar of Contemporary English*.
London (Longman). 1972.
J. Hook, E. Mathews, *Modern American Grammar and Usage*. N.Y. (The
Ronald Press). 1956.
Kirchner, G. *Syntax des Amerikanischen English*. Band 1. (Hueber). 1970.
Krapp, G.P. *The English Language in America*. 2 Vols. N.Y. (Century), 1925.
Mencken, H.L. *The American Language*. N.Y. (Knopf). 1936.
Wentworth, H. *American Dialect Dictionary*. (Meicho-Fukyu-Kai). 1981.